

称号及び氏名 博士（言語文化学） 小西 美来

学位授与の日付 2022年3月31日

論文名 『源氏物語』の和歌表現

論文審査委員 主査 青木 賜鶴子

副査 田中 宗博

副査 西田 正宏

## 論文要旨

本論文は、『源氏物語』の和歌について、和歌の分類を前提とした解釈に疑義を呈するとともに、和歌を構成する「ことば」に着目して、和歌の表現を探求したものである。

第一章『『源氏物語』における和歌の機能』では、分類に当てはまらない和歌の存在や、分類を前提とした解釈から引き離すことで、意味の読解が可能となる和歌があることを指摘した。

第一節『『源氏物語』の和歌の分類に関する研究史』では、『源氏物語』の和歌の分類に関する研究史を概観した。『源氏物語』の和歌は、詠み交わした人数によって、三人以上ならば唱和歌、二人ならば贈答歌、詠み交わす相手の存在しない独詠歌の三種に分類される。そして、唱和歌は連帯を、贈答歌は対立を、独詠歌は内省をそれぞれ示すものとされている。このような分類ごとの枠組みは、和歌を解釈する補助的手段としては有効な側面もあるものの、近年の和歌研究においては、分類ごとの枠組みを前提とした解釈が絶対視される傾向にあり、前後の文脈から和歌を切り離した解釈がなされることがある。この点について、分類による解釈を絶対視すると、和歌そのものの解釈を誤らせ、和歌表現の奥行きを浅くしてしまう危険性があることを指摘し、本章の基本的な視座を示した。

第二節「浮舟の手習歌 ―その異質性と機能について―」では、内省という枠組みで論じられることが多い独詠歌について、浮舟の手習歌という観点から考察した。浮舟は、独詠歌を多く詠んでいる人物である。独詠歌は、「内省」を志向するものとされるために、独詠歌数の多い浮舟は内省的な人物であるとされてきた。浮舟は紙などに書かれた独詠歌である「手習歌」も多く詠んでいる。「手習歌」は口ずさまれるだけの通常の独詠歌に比して、他者の視線を希求する側面があることが指摘されている。しかしながら、浮舟は内省的な人物である、という前提によって、浮舟の手習歌は自分自身と対峙する自閉した営みと把握されてきた。この点について、浮舟の手習歌は「交流の希求」を契機として詠まれており、自閉

した営みとは考え難いことを指摘し、独詠歌にも他者の視線を希求する外的な側面があることを指摘した。そして、浮舟の手習歌の対人性に着目することで、浮舟が和歌を詠まなくなる理由や浮舟の人物像を矛盾なく捉え直すことができることを示し、独詠歌がすなわち内省的を意味するとは限らないことを論じた。

第三節「唱和歌の契機 一連帯の場に関する考察一」では、唱和歌について考察した。三人以上の人物で詠み交わした和歌が分類される「唱和歌」は、連帯の実をあげるとされてきている。その一方で、三者未満で交わされた和歌については、「連帯の実」と関連付けて論じられることは少なく、和歌における「連帯」という効果は、三者以上の和歌が場面にあげられることによって発現するとされてきた。この点について、『源氏物語』においては、二人の人物の和歌による唱和歌の場面もあることを指摘し、連帯の契機となるのは人数ではなく、和歌が詠まれた場と関連していることを指摘した。そして、連帯の場とはどのようなものかを考察し、『源氏物語』における連帯の和歌の表現性を論じた。

第四節「贈答歌考 一橘の小島における浮舟詠の解釈を中心に一」では、恋の場面の贈答歌を中心に、二者で詠み交わす和歌の表現性について論じた。贈答歌は、個人と個人が向かいあって対立するものであり、答歌は贈歌の文脈を踏まえるものとされている。この点について、恋の贈答歌には、個人が集団に対して詠む場合や対立ではなく連帯を志向して詠まれる場合もあることを指摘し、従来の枠組みが絶対的なものではないことを示した。そして、浮舟が橘の小島を前にして詠んだ歌である「橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ」については、贈答歌の枠組みで解釈をすると、匂宮の愛情を絶対視していることを詠んでいることになるが、このように解釈すると前後の本文と矛盾するという問題点があった。この点について、贈答歌の枠組みに則って解釈するのではなく、和歌が詠まれた場面や和歌のことばに着目すると、「橘の小島の色」とは不変的事物の象徴であり、そのような事物を前にして、浮舟が匂宮との関係を不安視する気持ちを詠んでいると解釈できることを指摘し、かく解することで矛盾が生じないことを論じた。

第二章『源氏物語』における歌語表現」では、『源氏物語』の「ことば」そのものに焦点を当てて、読解を行った。

第一節「浮舟歌「袖ふれし人」は誰か 一「春のあけぼの」に着目して一」では、浮舟の歌である「袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの」について検討した。当該歌で浮舟が呼びかけている「袖ふれし人」については、薫と匂宮のいずれを指すのかで議論がされてきた。従来の論では、浮舟物語をどのように解釈するのか、あるいは、浮舟をどのような人物として捉えているのか、といった外的要素の解釈に従事する形で当該歌の意味が決定され、和歌を構成することばから読み取れるものについては等閑視されていた。この点について、「春のあけぼの」という語に着目し、和歌において「あけぼの」という語は、具体的なある時を示すことを指摘し、浮舟は春のあけぼのの時間を匂宮としか過ごしていない点から、「あの春の日のあけぼの」とでも訳すべき当該歌は、匂宮との関係を詠んでいるものであると論じた。

第二節「流るる月影」考 一紫上の歌「そらすむ月のかげぞ流るる」を中心に一」では、紫上の和歌である「こほりとち石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる」について考察した。当該歌は、光源氏と朝顔齋院の恋物語の決着がついたのちに詠まれている点から、光源氏がさまざまな女君のもとを移動する浮気癖があることを紫上が当てこすったものとして解釈されてきた。そして、月影を流るとする表現は珍しいとされていながら、「月のかげぞ流るる」の意味については「移動」と解釈し、詳しく検討がされていない。この点について、当該歌が詠まれた場面においては、月の静的な美が強調されており、従来の説のように「移動」とは解釈できないことを指摘し、紫上の歌の「月のかげぞ流るる」とは、月の光が照り映える静的な美を意味する漢語の「流光」の影響を受けてなる表現であり、庭の池に照り映える月光の静的な美を詠んだものであることを論じた。

第三節「鴛鴦」考 一朝顔卷光源氏歌を中心に一」では、光源氏の和歌である「かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか」について「鴛鴦」に焦点をあてて考察を行った。光源氏の「鴛鴦」については、「円満な夫婦関係」や「一人寝の孤独」といった恋や夫婦関係に関するイメージを想起させるものとして把握されてきている。しかしながら、恋や夫婦関係に関するイメージを想起させる鴛鴦の和歌と、光源氏の和歌では、表現方法が異なる。さらに、この和歌が詠まれた場面で、光源氏は夫婦関係や恋に関する思いを言葉にしたり内面で考えたりもしていない。この点について、鴛鴦を詠み込んだ和歌の系譜を確認し、鴛鴦が円満な夫婦の象徴として詠まれるようになるのは、『源氏物語』が想起させる時代よりもあとの時代であり、『源氏物語』が想起させる時代と同時期における鴛鴦とは、「過ぎ行く時を惜しむ」という「惜し」の掛詞として詠まれる傾向にあることを指摘し、光源氏の和歌も夫婦関係ではなく、過去を惜しむ気持ちを詠んだ和歌であることを論じた。

第四節「落葉宮物語における黒髪と想夫恋」では、落葉宮と夕霧の関係を描く場面において、強調される要素である「黒髪」と「想夫恋」が喚起するイメージについて検討を行った。従来、落葉宮の黒髪とは、男君の支配下に置かれることを示すものとして解釈されてきた。この点について、落葉宮の黒髪を描く場面が、和泉式部の歌である「黒髪の乱れも知らずうち臥せばまずかきやりし人ぞ恋しき」を喚起させることを指摘し、黒髪の描写は「想夫恋」の楽とあいまって、落葉宮の過去の夫である柏木への思いを表出させることを述べた。

「結語 一今後の展望一」では、本論文を総括し、今後の研究の課題について触れた。『源氏物語』は、多様なことばを取捨選択して、和歌を構成している。独詠歌（内省）・贈答歌（対立）・唱和歌（連帯）といった分類ごとの枠組みを絶対視すると、『源氏物語』の和歌表現の解釈を画一的なものとしてしまう危険性がある。さらに、『源氏物語』の和歌を解釈する際には、物語や人物造形に関する解釈に従事する形で、意味が決定されることもあるが、和歌を構成する個々のことばを重視し、表現を探求すべきであることを明らかにした。

## 初出一覧

### 第一章 『源氏物語』の和歌の機能

#### 第一節 『源氏物語』の和歌の分類に関する研究史

新稿。

#### 第二節 浮舟の手習歌 —その異質性と機能について—

「浮舟の手習歌 —その異質性と機能について—」(『百舌鳥国文』、二八号、二〇一七年三月)。

#### 第三節 唱和歌の契機 —連帯の場に関する考察—

「〈唱和歌〉の契機 —『源氏物語』の連帯の場に関する考察—」(『百舌鳥国文』、三十号、二〇二〇年三月)。

#### 第四節 贈答歌考 —橘の小島における浮舟詠の解釈を中心に—

「『源氏物語』唱和歌考 —橘の小島における浮舟詠の解釈を中心に—」(『百舌鳥国文』、二九号、二〇一八年三月)。の内容を基に、大幅に改稿した。

### 第二章 『源氏物語』における歌語表現

#### 第一節 浮舟歌「袖ふれし人」は誰か —「春のあけぼの」に着目して—

「浮舟詠「袖ふれし人」は誰か —「春のあけぼの」に着目して—」(『日本語日本文学論叢』十号、二〇一六年)。

#### 第二節 「流るる月影」考 —紫上の歌「そらすむ月のかげぞ流るる」を中心に—

新稿。

#### 第三節 「鴛鴦」考 —朝顔卷光源氏歌を中心に—

「「鴛鴦」考 —『源氏物語』朝顔卷光源氏歌を中心に—」(『解釈』七〇七集、二〇一九年四月)。

#### 第四節 「落葉宮物語における黒髪と想夫恋」

新稿。

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 小西 美来  
学位論文題目 『源氏物語』の和歌表現

言語文化学専攻（分野）の論文審査基準に従って、審査結果を述べる。

### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、平安時代を代表する文学作品『源氏物語』の和歌表現について論じたものである。第一章では、『源氏物語』における和歌の機能について論じている。『源氏物語』には、作中人物によって詠まれた 795 首の和歌があるが、これらの和歌は、詠みかわした人数によって便宜的に「唱和歌」「贈答歌」「独詠歌」に分類され、その分類の中で論じられることが少なくなかった。また呼称についても、たとえば同じ「唱和」という語の指し示す内容が論文によって一定しない場合があったが、本論文では、第一節で先行研究を整理し、「唱和歌」「贈答歌」「独詠歌」の呼称を見直し定義している。次に、第二節から第四節において、「唱和歌」「贈答歌」及び「独詠歌」のうちの「手習歌」について、読みかわした人数ではなく、和歌が詠まれた場や前後の文脈によって解釈すべきことを、具体例をあげて説き、その機能を明らかにしようとしている。

第二章は、『源氏物語』における歌語表現について論じたものである。和歌に詠まれた、それぞれの「歌ことば」が『源氏物語』以前の和歌や漢詩文では、どのような文脈でどのような意味で使われてきたのか、また『源氏物語』の文脈に置いた時にはどのような意味をもつのか、といったことがらを丁寧に読み解いている。

以上のように、本論文は、『源氏物語』の和歌表現について、その機能と歌ことばの面から考察を加えたものであり、研究テーマが十分に絞り込まれている。

### 2) 研究の方法論が明確である。

第一章「『源氏物語』における和歌の機能」においては、便宜的に行われてきた「独詠歌」「贈答歌」「唱和歌」の分類について、研究史を辿り、用語の定義づけを見直したうえで、それぞれの枠組みに当てはまらない場合について、和歌が詠まれた場面を重視すべきことを論じている。第二章「『源氏物語』における歌語表現」においては、『源氏物語』以前の和歌や漢詩文の用例及び同時代の和歌の用例等を調査し、それらとの比較から、『源氏物語』の当該場面においてどのように解釈すべきかを明らかにしようとしている。これは、古典文学研究において、きわめて正統的な研究方法である。

### 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

『源氏物語』の研究は平安時代後期にすでに始まり、以来、膨大な研究の積み重ねがあり、

現在でも、古典文学作品の中で研究者人口が最も多いものの一つに数えられる。本論文では、第一章において、本論文にかかわる『源氏物語』の和歌の分類についての先行研究を網羅的に調査し、問題点を指摘したうえで以降の論を展開している。また第二章においても、論文の随所で、『源氏物語』研究と和歌史研究双方の先行研究の知見が十分に踏まえられている。

#### 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

第一章では、『源氏物語』の作中人物によって詠まれた795首の和歌を、詠みかわした人数によって「唱和歌」「贈答歌」「独詠歌」と分類する従来の説について、まず定義づけの見直しからはじめて、その枠組みに当てはまらない場合について具体例をあげて丁寧に分析し、詠みかわした人数ではなく詠まれた場を重要視すべきことを説き、『源氏物語』の和歌の機能を明らかにしようとしている。

第二章では、『源氏物語』における歌語について、特に「春のあけぼの」「流るる月影」「鴛鴦」「黒髪」に注目し、漢詩文の用例を視野に入れつつ、『源氏物語』以前の和歌、同時代の和歌の用例を丁寧に調査し、意味の変遷を跡付けたうえで、『源氏物語』の文脈における意味を考察している。いずれも用例の比較・分析に基づく堅実な論である。

#### 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

第一章『『源氏物語』における和歌の機能』は、既存の和歌の分類が絶対的ではないことを論じたものであり、既存の分類によらない和歌の機能が明らかにされている。また第二章『『源氏物語』における歌語表現』で取り上げている「春のあけぼの」「流るる月影」「鴛鴦」「黒髪」についての考察は、いずれも従来の解釈に一石を投じるものである。特に「流るる月影」「鴛鴦」の考察において、『源氏物語』の和歌が、『源氏物語』が成立した時代ではなく、『源氏物語』が時代設定している醍醐・村上朝の和歌・漢詩をふまえると指摘した点は高く評価できる。以上のように本論文は当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容と言える。

以上を総合して、本論文は、博士学位論文として必要十分な内容を備えており、博士（言語文化学）の学位を授与するに値するものであると審査委員会は判断した。